湖月鈔 しい本

三十五

内閣文庫
和書 類
八五四四 號
六〇 冊
二〇三 函
一一 架

和書 類
八五四四 號
一一六 函
一二 架
六〇 冊

内閣文庫		
番號	和	8544
冊數	60	(42)
函號	203	31

国立公文書館
National Archives of Japan

大日本帝國圖書印
淺草文庫
明治十年購求

柏木　花以テ詞并ニ歌ヲ為巻ノ名ト　衛門督ハ柏木とう
いふことあり　何も十ハ柏木よ衛門の弁ハかくさてまし人
なりしをかくす者のことを云　細　源四十八歳の正月より秋
の末まてハけりと若菜の下ハ四十七歳の十二月まてて也
盃　源氏四十八歳正月より末まて　秋つかたまてハかしまだく
ありさまし薫誕生しける

衛門のかんの君　細　病とこ
よりくまなく年へ
ておもしくし
さおもくうけたまはれん命
をしらく　おもうすると
命をおもひとるまてとひ
ありしを
つとにとりかへさる事を
父母よさきたてるの
歎きをうけし不孝の
罪とりきることも
わかれして
おもひとりかへさるを
おふかれしそてきるに
わかくのハおもふうね
男そとも思ひりをさ
ことへいひのかけく
ひとりけるのかけとに
男と見ゆひゆし
花一川八年三宮の返歌
の位年にまで深き顔
もし居ならればかりし
なく　細　女三宮とちりえ
でしことみざく　花晩月

衛門のかんの君ハくのこるやとわさり給　眠　源氏四十八歳之
ことしも年をこそ年をくりぬ
柏のくミぞそ
なげくに小宰相かりすげくさ海をこそ　段仕のもくと四十七歳之柏木の父母の之
まつよ　細　以下柏木のふく
あおてうけるれるん命なひるに
くつこをりうくこゝ　をふころいへ
として父あれがるよこの世あるれども
くやしきとどめ海浦しき男ハいけなる
かなし　猶よりおふるこゝをかくて何ま
とをひとふも今一たびはとうるんとぞかれ
やけまくのとはれてかのめる　細　段の下て
きこえ　お気ハ宮のむしろ
とおもひへのかりしかどそのころすひが
さうりのとひとりぞのふうぞとよ

孟思誠之
るべくの世の事をも病じ
う　孟太さの我身ひ
との外のことゝかり
――
神山ふもあくかれん
孟以つくふる世をいひてん
ふーそ我ゆる山ふまを
みづくられたろまく急
つよふつかくらん――

身をおもひてしきすさ、あそびくろ世
中する所しかもひらりて後の世のとこ
あへよ目いふつくすこの乙とむやまち
の法うしことをもひて我山のしもあくがれ
父母の恨を遁世をつきたのそげ道
んたのとりさ侍ふしるべく出がけしう
どとさ面りうざ面よふもざらはしつ色
しつかをつみよる我よしさらまべく
女三をらよまりせねく深世よそられわらやむずく
を見てぬりのもひの一ささるしば身をり
をひふるうれ我らりほりま誰がいつら
孟只我身を恨とく
さらろづくりてそこるひつうまそ
我ふのしろ物そころひしとく
おめれともふよふうしめざさ人ありかし神仏
孟天不怨人不尤
よそくこうんかさるさい是これさるべ、さーよ
お世の因果とし

これもちとせの　何らく
も世よんふ松のうるみぬ
う形もふみとせの松ある
らうくよ　六歌小町
人ふもとらしうらちのぞ
まぬべき　細今多く歌仙
らぐ女三宮も此る世人
と世かりしあはそろるも
うあらんとどらんしとく
るけの哀をもうけ给人
花女三宮のまろ仰るけ
やりの哀をもうけうふ人
わらんいさとく　細
ひふ何ふいふの　装忠乃
身をいづくよ前をこと
をひらりそひよりて
まりさり
我も人を　細　召身の為女
三の宮乃内よあうさつよ
みぐくて八不守無と去
とらまふし
ふかしとんといまくん
細源の垂れよ物がへんの
も死後よいるそまそしとく

こそあしめ、これも千年の松ありぬせい、
つるよとまくべきみをあしぬと、りく人みも
すらしうちのざれぬべき禄ふくあげ武家
ともうけ给人あらんとてそいひら何忠けり
衣忠と細しさんく
りえあうさつしあいとあ、をめてみがくへぞ、
ちあそ生ゝ毎しそし
そのづらあうまじき名我りもらば我とん
もやとうらぬされいぶへうかやうしもあら
孟人垂之
んとりいあめしとふよい给つくんおくうりよ
もさりともわりゆかいそんてしまう何の
ことい面そのとぢめ也はされさてぬべきこと
孟その列のおやもらいあさとく
ざかうえしとざ面のおやまらしあけれど
孟源のむすこりくきまとく
ちしれりのくありつしじとゆうりしすーひ

なしくれどもなく
細 行くへも知れざる
こしもとゝともれとし
師世の不義をなるもと人へ
こしめしりやがておろ
かれんとおもひてハせられ
ども。源よりかられて梅
るかもりひろくいゞら
よ身をころし名をとゞ
とゞめて柚木まで
あるまじ。是とおもひ
て人のいましめとすれ
なすべし

語かしくこの表も出ところ（細 源よりとゞ（ゞ）もよく出ところへ（と）くに）なとぞつれづく
よ母のひづらもいらんしいしおゞさ（細 女房かぎり）
なし。すべくはどもすきをみしはゞら
身をかくとうさくしおもひきれぐ。まつ
らそらうぬぞうら人へやりすくにみのし
そへつくいうとひまきとて人ぐ文といり（奴の隣ゟ 父母兄弟さとらせて）
まへる。深どまりにこま文をそれ語。今ハ（孟 女三之丞へ 孟 柚木の家臣）
りきりすいも嫁みて後おもひ雨ハきのづゞく
きこしめすあやうし待ちんといいぐすりぬり
とどまれどもとどめさせ語りぬもごとくり
なれど。いつもくを待りるしここ雨なくはいと
じりわるのけんく。おふことゝとるわれきさし（細 梅ゟのこ毎く）

今のなく（細 終焉の娵
もは世りしまりめべ
きむひすりとく 孟日
愚梅 呉く身ハそうりと
なりねとも。女三之丞り
むまぞりくおひえ枕
のうるべしとく 所 此世
とも娘をもいりよく
ぎんりえん娵のむまに
なれて

こなり（柚
いまはいてもえん今かりもむまだわれきえ
ぬおひのなまやのらん。表とこなの語りを
よ。こうろのどめらく人やりすしぬやとり（先妻柚木は安親と嫁そとく）
まづりんぞらの光ぬるも恋待しんとことしい。（おおいに柚木へ）
待娘かもおりず雨下表加まかたといひとこ（小梅後ハ）（柚のへ）
世まつりこれうくも。いまてひつふべきこし
しまへんわりとのさまへれバ。浅ひくも。わらへ（小梅後ハ柚木の乳母の）
しらまうとうりよまつりかへりつく。こえて（めいおのれかく）
まつるすれ人なれバ母けるきんこそ（小梅後つれへ柚木の女三之丞とえらへ）
こうそ是で。かられ。今でこそくハいとろう（るとこうえ今れとく）
でなくるハこの代也。嫁すこれさとらめ（孟 梅後り女三之丞ヘ卯柚へ）

おゝがそくれバ父ここの
お世二の次男もそふハかお
とうのやうにみがきを叔
よ世君の秘書の表バ
りんいみかりおうしようり
愚桜 柳木のりぶうとき
う…うもゝを表を君志
みなのらより

ろうき山より
江海よ役行者葛城より
よあらるゝとひそり只扨
まてもあらんかし

みをこそ作れと笑出ればまされもそふうわ
そうのらちして柳ん根そくれバみかわり
さの表ぶらいゆりひきつきれどいとくい
うさらしくおひらりめりがいゝそじうるん
つきりじそてざくゆうい絵でず。此ムの
おどの川よくづしやうるゆはあらね
どぞくしげるらんの次そしさの扨りく
よ中ねすりしねがいと此そろうさびべし
きなうへしられど次祝などおもらひで
とあ笑ゆれバおぶくよくいす綾とりて志
のびてしひの卑ざれれらしこみ未りね。
ゆらぐんりしこさとそるひへかうきさ山よ

まさうじおうろ。ねうけまそて。加持きうくを
んとゝし絵は修法護摩などもいとおびろ
みどろしうさなぞくらいんの中ますくつり。
さ海ぐくひぞうり川げんざるまじの扨さらく
よおもふくく氏源さ山まこりり出る
まどいそも。おそうしの家ぶらさとつうて
くゝうるのめすまいけふさく。ムづきる氏
やまのふしとをみなども。いとおかくまつりよ川
らひ給さ海のそこそうしとすくりのとよく
ろおさくおひてねぞのとくきうづくいなすこさ給。
陰陽師なども。おかくい女の果とのそこらし
るひ中なれバさうくしとりやとおやをとぐさ

まづ津べざましく
孟やうぶし八間に津べ女
しくハ細津へくしき
多とらへる細しやまろ
しきさんく
ごこくの声ハすさいらく
けおゝるかしくて
花世綾为原に時平公に勇
数忠中納言らふまうら
ひがしの門菅原師傍をも殷
とぶらいハ十二神のうち
倶毘羅大将と云をせて
わらひぞくくれとりぞ
とゆのてうしやうく死ぬぬ。
まく病の人はえつてえり
おめらり八数忠の兄八条
大将保忠のうすとも小野
縁起よハ多くとう花可

らふ抱のけろあらそれりぞくろうまするこ
まぬ月しまづくひくううく御ぐくを
験者さまく
もしさのふるりそりこのひぎうも。細みくさらるちあ
ひそりしやくの念封あしきふをこり
まけさるやうおまう川へさましくて。
あらくうまやどろく夫く。陀羅尼よむしと。
柏のんく
いぞくわるふくやうこのあくさ多くみやおろ
んぐくよの声すさは。いとけ功えろ
しくて。ひあくきあなべくここそ功かゆれを
てやすくまぐり出まく。この傍とうから
お柏木の傍はおふを放仕え参らあく
傍は柏木の出ふひてえ
ひ給。ゆうぐハさえしらう治らぐすさしらかをを
柏木のえ
そうらと人ぐさえくりしさをまへハざ上げ
放仕のえ
して。出びやうよこのひぎりと抱給し

勘之。是上此書の事よ右将軍う協り草給て書しとて考れ補しまひしとき
保忠このうすあり。柏木を保忠にまよそひよせて書るうしと見ゆるなり
ゆしろざびまれど
孟放仕の年よりまえと
放ろくしきさんあるる
とえり
ぬくのぞろ抱ども
細さ世ろ貴僧なれね
験者ハむしろひまふこ
とうとをさとぞ此柏木
を大切よそひまふまれよ
うく對面あるすむ
義なり
うれ皆ひまへ
こく文やくの病とうて
ろく小侍従よりれ多の
まうの墨按此抱のけお
らうまへく会くまへとせと
とのなるハさあれとて多く
しとく
さう此あうの 細女三宮の
気あすへれしうへしと
く墨按おおよ女の気うの
ぞうしるひやされどあり

給。ゆえるすびまへれど。おず紙らるやざうろ
とろうつきそ。抱まらひし給ゆくの。
うろうのどきとむうひあそこのまけ
らひぞあ給しまさ御おふとりおく
こらま有そつくぞりりまくるこし。御くし
まこのすおくけおらうるべくわんじた
まへあどこ御やうまうてしひ給も。いと
柏木へ
義るすり。れ心のまへおよよのつことゆをとぬぎ
よらぬまうくあすひよりえ人女のまゆう
とそ。議よさるれあうの多くまえひさむ
あすらいひとくしきさ多もひきうへやむで

みえぬものゝけのあらはれ給ふ
に附きたりとさうらふ紹
へるが柏木のうへにまし
ますなるべし
むかしの世にもありやは
ありけり
光業平二条后をぬすみ
かくしてせしなり

ことかしの身にそみては
御幸まひてしあくまで
に我ゐいさゝく身にも見え
らざりけり
その後のうちにあくがれ
てうは我なりしぬは身
ようつくれな女三宮乃

とうすこそ妬めくるれさてもかのとおも
さうらふありてさうらふにさあやまち
とひさいさくへの御名をもしそこともも
くりかへしこひむかしの世にもありやは
きれつともひぬるをするに花けくひらづら
ちとうへの源のれにうちかはりうとどもこつ
またりてうしよもすくへしも いとま 細 源の御威え
はゆくえゆりいげぬにとるうれひらり
一段あはれ かりそめしかやさおやまらもあさよこ
細 試楽の時のこと 愚 源よ同じ合しこと あらせありし夕アの袖よりやうらく
とうりがにひそめふしみ涌しぬの身をつ
をうくしるとするかふしとその流のしら 六宮流女三宮のあらはれ

こうかあくがれあるはむすびしふてく
あつるとん衣あつくみてそまむさにせよ
くしれても忘らねどもし
けふはくるし
おまの流の間よあくられ
よれりとしあかとうけつく
へみとえし

さくらは玉むすびしつてく 伊勢物語 我のおもへりあはれし玉乃
吉備云の玉むすびの寄 ぬんさ川
萎中色よ涌ス

あくがれありなばむすびとゞめ従へよ
どやしゆかんげゆゑのやうなる涌し 嫁のりしのし
てあらくこのひとうしひ給え女も柏 小侍従も女三宮
とのこうしうさまとふりしつつ のほめる衣をしらくく
さ涌てうくらぞうらあめりなりやみ 柏木のらく女三宮れはわり衣をもひたりしくく
まつらんれ涌の地をとうげよこなつうら
しらくえやうれまへいげよあさうて涌
やゆさうのふらんうつくしさくらよ
色ぞうれば今さうまこのほくしよう 柏木の胸へ 細 哀れる胸へ
けそもはかしこの世ともうちさくるすく

こし茨ぬ一　細　猶のうへ
西　猶ざりしとまいりし事
此集下にありてくやう

うろうかしうしてあかり
いそぞうへ　愚案　女三宮
御こゝろの詞也彼柏木
の文よ今ハかぎりよ絶
まくらかりあり給ふ
のぞみ給ひしも皆ら

てさらぬわかれを。みづからは世のほだしにもこそ
〔秘一念の女三宮の御ほだしとなりなんといふ〕
とおもふなん。いとほしき。心ぐるしき御事を〔女三の御懐妊と平産とをいふ〕
たひらかにとだにいかできゝおいたてまつらん
見し夢を心ひとつにおもひあはせて。又かたる人も
なきが。いみじういぶせくもあるかなと。とりあつめ
おもひしみ給へるさまのふかきを。かつはいとうたて
おそろしうおもへど。〔細　女三宮の御ありさまを小侍従かたりしを也〕あはれはた。えしのばず。此人も〔小侍従〕
いみじうなく。しそくめして御返りみ給へば。〔細　宮の御手なり〕
〔女三宮の御返柏木の文〕てもなをいとはかなげに。をかしきほどに書給ひて
いかでかは。〔女三宮の文の詞〕心ぐるしうきゝながら。たゞおしはかり
そのこらんとあるは

んをいくであり給ふよしをきこしめしたる詞也柏木の今ハの子細をきこしめし入
女三の宮もひきかへ給ひて心くるしう思召さるゝを柏木の身にしみて思へる也
やるかたなくおもひつゞけて志がたく思ひしみ給ふ也
しきたる事なるべし。旧説柏木の詞とかく義也
あはれとおもひ給ふ。細　此宮の柏木の方よりさまでの事を
うらみ給ふべきにあらねど此宮よ、煙くらべといへる
おもひとく
柏木の絶ゆるの煙よ女
三も立添て消やせんと柏
の絶ぬおもひの煙や残らん
とよみ給へるに立そひてきえやしなましとよみ給ふ
消ぬおもひの残るにあらず
しもおもひ乱るれば。先立て
煙とならんとおもへるとかや
さらぬわかれもさだめなきを
思ひやるといへる詞を
あはれにおもひて。細もおもはしく
いとあはれにかなしく思ひて
おほかたの事よとてぞ
因果の道理よりて宮
の御ありさま此世の中
明星に註せる也
このく
いぞや此煙　細　此事をさも此

〔女三宮の御返歌〕たちそひてきえやしなましうき事を
〔女三も柏木は〕おもひみだるゝけぶりくらべに　おくるべうやは
〔とみるべくいおくれじとなり〕とばかりあるを。あはれにかたじけなしと
〔柏木の心也〕おもふ。いでや。このけぶりばかりこそは。此
〔柏木の詞也〕世のおもひ出ならめ。はかなくもありける
哉と。いとゞなきまさり給ひて。御返し
〔細　又御返りを申給ふ〕ふしながら。うちやすみつゝかい給ふ。
ことの葉のつゞきもなう。あやしき鳥
の跡のやうにて

世のたとへて信まじく
あるのおくにやうやく
文ハほうそし　細 引鉄る
し呉綾とうらんゆ
ふべのんおくべし
しやうのし
細 昔君ふく歌すでん
国をうしかくもぞと
なり孟日師とひる
かあまふとも我なきに
おしまハとがあられ
こし

今さくらよ　細 昔す歌と
人の光べきみとても
かふうむりれらしまそ
女三と何うかお世の縁
まそり及びなる我

河
蒼頡観鳥跡作文字　史記
盃 柏木今ハの時女三宮への文ゆゑし
好来るさ空のゆふかとなりぬとも
昔おもうやよらいなすれじ文ハまさ
てすがわらせまんじがあるてさせ給りん
盃 ほのうすし
の紙はひうひうさ衣ろがくしてさ衣さをよみこえ
ひるめとも今いんやとくゆかり物にくらハ
あまき衣とぶふも給どうけさせまへる
出 那てし
どうきうぶりてくちのくすしさまさり
柏木の小侍従よ頼し
それバりいつにうまねされよりくりま
いりきまひてうく恨のさ海よるんとも
ゆくしまへ今さくまん人おやもしとてひあらく
きんをわが世の後さへとふつそくすまれ
いうる昔のちぎりまそいとうかうし

この文ことさ人とし
おくくわさりいで給あれバ
おまやそくまぶりあそく
小侍従と手ひあふて
あり今又彼ぐし手よ
むかへかなりおかあく
例えむどり
盃 例ハ杢朝もそく書
の所ふりとき面別しく
取りひて侍従をす人を
まそ給ひつふそとえく

もらよちくきんと。ろすくわかくりいぞ
盃 小侍従うかし 細 安駒也
給あれバ例ハむごよじ人とへてまで
あつしとさへいさせよ消えうち給ども
細 そく文みえても海のまれとのさふハ古歌重き飛かし嫌むし
とずくなふくりして。ふが衣るるよ文
柏木の御をし
もいぞやれいバおりくは梅をせめのとも
細 侍従をそて
かくりて。いさじうるさくまするへ。ゆらぐ
柏木の文之
まじの花しうる気色ぞいきじくや。
其日こふすまるらつるとおぞ
細 柏木の頼之
うへとまうげゆはさく給とさつぐ給
なのまへるとまら侍らまぢさきあり
盃 柏木之
とゆしめて。こがくしもるい給らや
盃 女三の海
産也
此られつきまうるやまうしうさあひ

へんのことなりけれど
哢 源氏のあやふみしさゞ
へいさひがらんとて
はまゆれならざんなられ
ありて
そこはかものゝまゝ
孟 河海う八作者とわ
こ

きうと、そのおほきしさとこかりきりしゝう
人ぐさつきこらに。おほしゝかも御ゆかしされ
されバ、中ごろさてよこきりあつり。おのゝの
うちみは、おなくらわしや。中りひゆうき
かしさすくてこなりましくべからし
くゝきつきしなしと地でき。人々へ
氣色わりしきこじと若をはぢんざるを
めし。こそも給うていひしかくふくさん
よきしられバそこうたのみうふぢんあり
うぐりこれまりてうぢまへんさつて、
秋ひと夜ろやのおさとのひくく。世さ
しわぐらうじよむよれきぬ中つこゑ

細 れ度の事也
細 源氏みも吉さうこ
細 源のこと
柏わのさうすくて
師 人目とえ
室の様子するにとえ
さうよし給りなく
細 葉の匪是也

みくんごうしき
細 男みいるとぞうりよ嘉
し給もらうしかくる
言わりて源の思ひへし
給く女みくぞありひと
ろうよみ給ひぞうしえ
孟同
くやもあやしや
細 源のといひで前のうこえ
我身の因果みて。おう
なうこく此物語一切
ひとつひとさう
このせこてうくこひのけぬ
細 此世ふくむくいひとえ
仏は後世八ようとうりし
とのりこらこえ
孟 要集云有智之人以ヽ

くさく給よ。う志のびさうこのおや
みくよいつうざつきさうぞこそこうしい
でまつくんこそとうしろべきれ女ても分
みゝるすくまひれおゆさこの人れこねりの
すんべ。やとそられしと中がにてよ。おなさうこて
ろうつしここるぞひま志うくるみく八。
わやむ気るこまりの給もいとこうし。
さそもあやしや。わがうし兄よ中ろう
とむひしことのむくひ。るうめり。このゑる
てくむひみぬこころよ。むかしりぬれで。
のちれ世のつきともうらうことる。八そと
中がきて。ひとゝもこきぬこしきるれ八。うく

源のうく
細 柳本は能似くいとし
ころりのな
ら段ハイ
先のこてを
孟 冷泉院の御こと
他人ノ

智恵力ヲ能ク令ム地獄極重ノ之業ヲ現世ニ軽ク受ケ愚癡之人ハ現世ノ軽業ヲ獄ニ重ク

ちかくのめしつかさ二ん
河の聴召次所相見ハ
伝氏の院司ともく

細 事の心を知ぬ人のとかめ

かくしるされたるをみるにすこしよいでおかし
かるがゆへにつみとがのあるなんと云ひいとな
きつかうまつられたるがやの後世いかなる
たゆたくしれきこえがく海にてふかしは
でまみれたるがやしるひものつみのお
もき川がかえのふかつきものこころなへ
おもきさうなんでいとおもしきえて川
すんだ日の夜は中宮のれいきこりごうら
のれ主人のうみ女房の中にもさかぐよ
たおそろきはく地獄やけにとよへう
めしうちせまくられたゆとんじさみ十
ぐ前くのさかう流のきりくべらやうたん

孟 枕ね之　廿三の巻之　孟 紫式之　六条院之

此ハ人何ちより母地獄あれ
て　孟 柏木の巻よ依て
ちふやしあひと大るさ
よまが給く是様地獄を
うの所ゆひのことハ大う
よの内人まひからふう
へし

めつぎざかりなるよりのくゆかしてはつめ
しうきさせまつりしかづきたる事ゆへ
じめて院の御心人られまいらせ七夜
はべらせたまひしを地獄やけ海かなり
ちかの地にはかどくりてよつくうまうう
すべきよびかくるよごともぞまされずく
地獄ざりのれよふくひのこえぞきけかえ
よしら上達部るをおもへく系絵地獄くさ
のこしこみもよるきぞまそしづきこゆめく
おくどのれん心のくちようくろびう
こしと地獄をこしわりていふらしもりて
かくしみこて給ゑずこれおもびねども

孟 中宮ハ鐵之　細 中宮の事之　細 絵巻流之　禁中之　孟 隆之　細 御位は八うとく

みむつかし 第十
細 下心にかしくおもふ心
抄 まふの事みのかどとえ入
作 はぬく
とみへみもかはりせんする
孟 源の大将におかりもと女
三の宮女のそうく

かゝりぬ。京わたりはうちひく川なすら 孟 主之
れき海みつくいてむくり川けうおもふつね 河 源 さわ 之
こしとお心地そうしうかおされ[illegible]よれゆる
ともころしかさず。又のふうここしき。 柳木のこゝろ
くらよつけくも出かりいれどさづれた 入
のつおぞみをしおみあやしと出り[illegible] 源氏之 孔子すかしと女三の出かりとく
入目よ八貴人のかそうにりてうつしうつく どへいとまうへ人めをとぶらり出[illegible]をとしよ
ひつらけよおとなしすらなどとらりわたしてし
もこなり給ひぞなどおれバ出ひはさへ 女三の宮女の花とう
なひとなといひぞやそうかふも出うし
ますられ。見づらうさうし出。給へ参清
まを様のかどくりゆくさつさまでよおりつま

さやしくひくしうそうらかれバ京うるよ 細 女のくし好く
うくすてさのこゝろてハ出かりへとくらしく 作 女三之宮の本く
をまつらめとしうちしう。桃と々 方 つく
ておまみも出るひやのかしつきたね。こり 源の主
のけ方よ北霞すし好く みどもつるさよハ出月とのど りんじび
あつくるどぞさしのぞきて給ひ。世中の 細 源の宿
くらるきう絵ろまつるよも来えどうう於
わかそうていきそるすひかし目出しそ給れべ 孟 紀ゆしさく
つるお花のらくうけしきくるらるよう。
えまかれくちぬをいうでれうして、いさはや
よ出かり。ぬふうりやんぐりしうそくそ
れ未根のそぞくらうさうしのぞきさまつり給 孟 主之

さめてしそて出かり[illegible]
お さうのことこそこへ源の
をろゝよおかりますとふ
まそのゆるあひく源乃
かさ事ともろく。姫君よ
きゝんのかかりく

こゝろへハつゝもゆかり
西 産して死されバ罷
かりきとゝ 一
つゐのけれけのひよりハ
女三ハつるハなりよもとれ
と我のかふすハなさこ
あべし君実ハ異のい
ゑせすつゝもそろるべ
し

ぐしりしげ絹ひく、れえいさこゝろなし
（細 実の方の）
きゝらなん一伐銭からへハつともとゆ
（於 功の功徳ハいきうりやせんとこ）
まするおほよなりて、りしそれのやいさ
とまるとんえ文すくなりこもづこどう
しすふこともやらすん忘縛りとつゐの
けれけちひろりハいとみしるびくさとえ
絹やいこうそ、ゆくあさ仙ことわりり、
（細 源の方）
あづてりさまてハ御別とかりくしへさ
（えりまもとあやうしきとハいそ御別めすそとく）
（於 鹿のさえ）
のそこしそ神そろうるれどさそてありへ
（産して覚えとべさ）
ぬまさこゐすくべてそハあしめとこゝてさ
（すもあくもそのとて）
絹れ心のうらよ法まてとよさと御別
（細 源の人まし）
（死よりんとお別めさいくもあ）
ましてのくひづさやうりてこきずん
（まうんとく）

んどうれ絹らん
細 女三の源よんゑれ
のりんしく 於 源の方
よりねごとよんとう
まうんとく
えいひるくとも面じう
女三とそくありにて兄
なゝバ仏らくるすべ父
みりひるねとをおじさ
しくにいそのつき 姉婿
よかりへこことなろうる
てとしハのえんもいと
おしく 朱雀院みるも
下んハ志くせあるねバ
源の解 怠と砂ぞえん
されバさして死かるや
さんりくく
とくきこれぐゝの
女三のあくて於朱雀
こ出髪とそぞご捨んも
仏参しとく

ハ家るりるんかしら川をつてとこしこらよ
（西 くくそこくへ）
かれてんどうれ絹えんからんどらしう銭
ありしをしえ忘ひるをすおしうら紀
こく打まぞりぬべき銭なのづしうと
ろうよ人のそとうじしつしくもおうらんど
いとくゆしう、院るどのさうしめさん
（朱雀）
ことをわがとそてらりよのきこしそハる
らあはるすやさえよてしつけてさりや
るしなりてまするど覚えしれどみ
いとあうしう家よりどうりきを
さはづしのゆひさきこと、忘らや川さんて
（細 源の方之）
ともんぐらしまれバ、枕つりくゆがしな

きけゑうハおもせじうかりとこゆるく人も
あひしかるゝにもあしひかれんずすかに
しみのこゝろ世にもあんるにゆめしまて御ゆ
系り給ひとハうつりのやそて わき
ましろされバめくしおしあつれ御事
物ほどさら所くしけるわれバうちじこわ
やかくらおりとも心きらくゆすしつべき
心さ御られとこそかり給山のこうじハ後つ
らしさいくしとさひかうひかりところしめ
して衰よ康志り物あ得そえようくるや
を給ふしのこあれハいつるまのしまへき
うとはやるとこるひしさこふれて思ひしまり。

年比人々そそのかしきこえ
しかとまりも
女三宮の六条院へわたり
てより後は朱雀院へかく
まうでさせ給ふ事もなかり
しを此のたびはじめて御
産後の御悩ゆへ御見舞
にとおぼしたちて朱雀
院をとふらひ給ふとて
又もえあるまじきとおぼす
ゆへ也御心のうちハ
なほもかく朱雀院をみたて
まつらんとて女三の宮も
ぬかよみなりしやと
らうたく思ひ給ふ
よろこばせまさせ給
をはしに女三の宮の朱雀
院へまいり給ふへきよし
を御文をへだて源氏より
申させ給ふ朱雀院へかくれ
しと

さびしうおもひかうつる人の御心をさそふ
めでたくて月比へまうでたまひとかくりしけるく
おりあひて年比ことなくしづかりし給ひよ
つねに院のいとゆかしく思ひて給さやかに
をとなしくしをみそなはすやうにとすゝめ
るさい給ひて心もし給ふにきこえし
てつたへ給へば其をきこえせ給ひかれば いとしんが
さうにきけれしとかくしてあらましい心ろとく
は思しめしたゞようすれいておさせ
給ひてさうはらそうこともすくて儀よ
うへまうりおもふしまいらればあるしく院
ゆかしつさうしこしまりし給ひ世中へさろ

まじひきめぐりきたる秘ハ
この衣のやうに
人かのやの名は色々によ
わかれども
まよれさきざら衣川ござう
つまのまくらをそて
孟 衣経之花か不定の
義之 愚按 子のなくれ
親のさきに川ハ衣経
の次第く さるすで女
三のきさきざらあらく朱
雀も女三も妄執の輪廻
あるべしとぞ

うらめしく思ひけら給
源氏も遁世の法なら
ひなれバ朱雀の法海
をうらやミのみし

衣のミすましうおそろしさどうたまでまうらえひ
さめぐりきたる秘ハこの衣のやうに本たんらん
つまきれどもとらひもけいさいしてより
わかれさきざら川衣のずうつまのまくらを
てもれるハやうらく此恨りやうらさま
おもんとおもらきるすまふ此世のそれつ
べしとそうくりの人とさて給はれうる
らつるよてる海めしうするうつらきさ海
まじら思ひやつれすそうつし法わう
ふくみしんぞとぞめ見法をききおし海
わしうきミのしろまろもうしやまく
なり給いの衣川海地を給ふてひ

法皇の法 師 法眼之 源の之 細 源の釣 言ひ

こゝめがりつうかく思わし給
りんまる母をささるあがらう人給
みへさるり
女三のめがりつるすく思ひあ
ひし我深おむしなほいへまへと候

給はれ海ぐしたまり給やさ給まも御らだ
て月はよそり給へる御出後まよく
ありねるたけども系ぐねつりりや御うな
の給よてるぐしうてし給りさくちい
さおましなれどもそて法下のおへまれ
あとる系りていれなすり給こやあとを
とうりんぐつくろひ出してゆうはざも
まめえしさすり法本下もとうしきやとを
あそよるのうちのそうるどのてら
それとゆうざげんつくぞうりのぞこうるひ
かもおとねべつさりていきまれどもめ
めずつるく覚て給らんき海をさるあず

女三の 孟 御 女三宮の御庵の九帳之 朱雀をさ 女三をさ 文帝への記 朱雀の女三と見奉せあらへそて 細流の御消 両 駿付

のみ猶ふ御後見あり

細 もりまよ

わか末のまさき
こゞれなしくかくり
て人のそしりをおもひぞ
とゞまり思 出家ハさふかとき
こゝろかゝるおほくて未之
けなつゞくハ久りてとゞ
迷そしらるゝりもやむ
まゝこのあふ 女三の事
ミそ出家のさまたけのまゝ
とく

そのくさ〳〵ありとて。此みこたちのことを
女三宮也
後女もいとおはかるさいまにて。女三宮
くべうも思て侍しぬをとうくおりてまり
ようついくはあまりすゝせよへひてうと
細 院の御心
思ふ後さ御心いかくでいとうつしき
女三の宮の御母女御ハふりてこひわつらひて
こしなりどうすがよりくしぬ今の程よ
てもまくよさんハそくそこのこゝれ
あり世思人はそらうやうゆゑ
さこともるんをよどうりぬくこゝろど
源氏
の後はそ。中々の志よ。うくらんもとくそ
朱雀の御詞
切 後ハ若ゆるすへのんく
の後どいゆく限のさ侮そうつくハ時乃
片なりて出家の
明しみくもぞ出けまぐへきさ侮まうく

まけるとの人のこゝろ
孟 邪氣の所為にてもあれ
かくて同心不ナとく

物のさまのそしへ 細 院の
御詞くよし物のさま乃以
る事おしうべきことに
てとおもらえこそとく

ちらるふやうよへおもぬ
朱雀の御子との中のやうよ
ハ女三よ源氏のみむけの
おもぬとく

細 源の御詞
しるん。思すふるとのまへだ。日比もうくなん
尼まてなる人となくとく
細 点
のまへど。ふけるどの人乃ふしうつてりて。
うらうるよすけりやうしも侍りたりかさと
てどうしをいれ侍しぬなりとさうて。猶。
孟 朱雀御詞
物のけ乃そへてもそれよりけぬとそ
あしうべきことすうげそ。はべらぬ。
今ハのさハよくゝ思ふとも出家のさまたけとなる
よりうかゝる人の。限とそ物し給ふ人と
氣
とふうくすぐさんハ後の悔んぐうしやと
細 朱雀の御心のうちく
め給ハんのうらめくりうらうとくらし
源よ女三をと
源の
ろやむうくゆづり出しれくとせうけとら
抄 源の年比女三宮をうしろみとも心かけたく
すそ。さしも心よしうくらむぞ。わづらふや
うかはあしぬ御氣色とことをかけて。

ろうよりでくらくゝこゝろく
云なふまでく根かわべくさか
らいひざうろうのとゝ口か
しうぬかりまうらうかゝし
うらかりよりてなうれ
は次まに女三のお家として
源でゝりそえうれぬゝんち
つなりくんとゝ
細今お家わろへさこ
ぜゝ根よう守とおゝら
んうかつくは給なそし
へおよめつゝのの時か
家をうどしおひて八源へ
迷藤かんに不分守ある
かうなよるさ時舟とお
うしめもそく
さつこあうらざうらん
ま姫の中をうゝね大うさの
腹みよ八女三お家の後まさ
とこのまわんとく
とおづけ重をうろし
えりさのうえろとれよの
かれと源よおづけゝろ
志家しみゝくとく

とうじてくらう しぬがりしけめろうこと
源で朱雀のく
ろう出あくらゝそゝわしあ今さうしろよ
女三の源よ飛定をせゝれおんねをと世の合も口わゝさ後之
らねどゝの人乃世ひいろん不も口お
うかりしまうらうよくろうおりよりてなうれ
るんもなよりハ人まくへま世とうしくと
うらなし色るしでさうとあしざうんべら
さのうしろとゆは後さのまれめべき
源わてし
れとこそてなうとゝでおづけ重ひまりし
えうしよハなるてでふくげゆをむくさ
海よハあしずしも不そうふんよひろく
細 三条家へ後よハ女三お家のおりゝさし不之
腹りろうさ給りまつるをつくろひ
てすゆをなりんゝもろおりしゆすまよ
朱雀の御方世まく

めくげよろゝしくゝ敵よハ
おゝく六条院とおあやゝふろう
あゝくく朱ゝり女三かりをを
ゑかゆくゝもさつふとを
いまとろろまハろも
孟源もきゝらよさひらお
ふじとちゞり黒 女三の
出家して二条家へ女三八
あとらふくしもわくけよ
そしくさ病みもわゝれ
ハろもえそ分らのふせ
ドさゝく
よ
よしへく御しろうらうそ
女三のお家の御病来お
らハうく朱雀も御出やつ
わそふりく
いむしとうけ分ろへとた
細 戒をうけかふとゆて
絵源よをへきゝく
御 女三家の心うこ笑り
そうくとも戒をさふう
けて法源よせしめまへ
らせんとく

あゝいつよ源氏を根き あくやうよおごで お家をさせそへ ゆへと
おあやゝふろう不分の家よ後世ゆつせんとく朱の御病不分よ給
りかりのふなりり
しゝひ女三のお家のゝさかそく
さうこくそもうゑろめとうべにきて
とさ又のゆくもさつふをとゝいなと
ことそ
うらよハうをさひしろすら給つしその
源の御ゆんの事ともえ母へとそ
こうわざへともうえてんなでゆも病
朱雀院の御てく
とりてぞしべくりのしうろつわぐ
よゝむしくしうけ給ゝんをざうるよ
ちんりしとの給ひさおとくの家うし
ととも忘れて
とかげすうくまむさされてこはいろかお
べきてとぞとうのしくにおし世れどゝ
孟ゆくの内よ入りひて女三八の御てく
えうこん給うえぞうらよいりてみどうう

いく世しも伴ふあまくさ
盃古の世しもわらし我
身をみそるらし
きうとさこるありともも
御をこゝろひも此身よ
つくてハありさつらん
しかどもまいりて御
菩提あれとく

これまてうしめしと
盃 女三のとへハつれなき身
やうふかくぶよ涙とう
らくとかふるわかうと之
暁日

泣つくけりんん
御 来雀ハ別して女三之
御望みそおかりまする世ハ
あわされなめくるてハ
人まもく家くやうふとお
かいて涙を 捨るかり
なひさし

いくろくもう
いく世しとけふまじき身をうけましてく
尼ハとくえ
かうハ出家し給ふすぞ 我きづしんきし
げめそて御湯まいりありなどともてこと
しめそしうりときこととありともお身よ
かうてハとこうひともあひちんや かハ
つくひおそこそと笑てまへどうしら
女三のき段之
竟も最のさせまいらせる之
みりくいとつくらのまふと思ずしいう
源の心之
これまてうしめしと出がもとしもわ
アまもらりやしとさすり給ふいてもいう
源の女三の出家とくわかふすき源之
家あうりとうくさくへさしひ出りしやど
らふ雅よ夜あけりてまたりねくうい
細 来雀源之
らんまたもあうへくしまるうへしとい

そうとるてけいのりよう家し後傷てか
御 慈中之
のよ居んぐしまうしそうしそれ涙めしい
女三の出家之
出家くおぐし出もろさを給ひてさうり
きよしかたられぐしさそこそもそくいひ
一しうけ給さ用うゐしくに出かれ
盃源之
むし出くいハえきのひあへ給りぞいろう
来雀之
るハ給ひ院とまこりしうりろうまうてや
女三の中よ女三之
んぐしまうへかりをとそくれてこなくう
尼よなりあつく後世ハさのりとくし
んと思ひし給この世よへうひるささやうに
すしきりもわりもどうれしかれハぐらし
来雀の女三ハの出家之事 出家してもせめて来
そくれまそてうくてましひしうみくそれ
安まかへ後世とえ
じうハわんがくとももつさめさ身ヘしとこと

人ゆ併んをくられめ
細源のもしこまりきしたへ
由礼をえ君へまゐらせ
めでたく

えとふさゑて呪ふそぬよいそぎ出さともぬ。（お朱雀の御陣ぞく衣をかさまゐらうへ）
（お女三の御前之）きやへるをよゆうしこよしいろやうふみしめて。
そらじきさうりえをむかしくび猶あるともさ（朱雀の還御ともえ見のえたへ）
こ給つど御くしも蔓のやうよさやくへを（源）（源氏の朱雀一の御こ）
ふうしんゆうんひよりう青ぬかしうさ（お帝よ朱雀の六条院へ御幸）
（えしるゆゑふで）ゆさのりしとまりどもど。らへれらんぜられぬ
らうかうさは。こしさうしよふ手り作らく（お ここくし御山へまうりてよろこんとのまで）
まし中の給お道よ人ぐ手しを給世の（とをり）（細 院の）
（御見之 お彼御出家の御のさく）中の名ふくらわもとうりの由ゆ御へ給よ文（細 女三）
（とあかけまふうさんへすうでたく）たふんへりすくてしてしよのかへしの衰へよさ
まかもまう出そく仕しか便御いまそしわ（女三をよかしや白しう 源）
（の御法足よへおのまいれとく）らぎりけあどく中めしつけてとし以六

さ陵こしよかわりしく
細尼よ御族そく代族よ
作るへきうしまいぐ
なりし文今さうし山里を
ともよ作るへぐきふもわ
らぞとく
さ御りとふくさうひらく
女三の御おんさ倣のお兼
よ御るべくさうしひ給
へしのふ之 お覚へちし朱
雀の下らおの御世の御之
うしにいかそて御かせう
あくちんらかりてくろうり
そしか朱雀の女三と源て
よのこまひしひるすく
尼よありすひてのよにさ
まよちうさひて由び
らうかよしくし今文よ
朱雀御帰れば源のさゑま
さまつるひ中さぐうな
るとそへさうしとの方へ
さうりら　源の兵衛と
あく女三の御出家よ志神
しそと来りあく女三のひつ

うろやそくさゆへつゝとりしもいさと内（女三のく）
つき作らへばさ陵こしよかうりて。人をおぶけさ
すまるもつきたりつべきとさうへきさ山
里などよかけをおれさしんお族もし文
まずうよふ御そうへらやさ陵よゆきさ
じひく。枕ゆかりそるゆまじくまんと
ときこしてまへばさしようくいそてゆかたせら（細 源の殿）
あくかんうくりてたうくうもあかへらそ
そうしびら。とくくされ作て御手（女三の出家 朱雀も）
えわさかん作しもとてげみいしるへが（の御根伯木のさく出かせと御へぐ）（や曉のさしき）
よ茶ふ覚しやう。婚夜のはしらよ御猶（見の女三の御出家を在へ御く）
のけ出来くうぞわかよいかくるうと（ぞくき）（細 柴上とそり）

るりと朱雀ハ未多かれハ朱
雀の御心ハ程遠かれど
いまハ入りたまへてもしまし
らふ　河　光源氏御住居小一条
院の女君　頭光女乃邪気
にて法会の流れむまの氏
久しく物のけにて候は
御かひさせたまふを故
邪気の人よつきて今と
そこられしられそれを
許て勢ひかかりて
よりはうきれ

まへしつと、ひとりをバかりしらりし
かひしねさうらしべこのもとらりつよさり
げすくてらん。目ばさみしひつりとハへくり
うんとそこらもらふ。いとわさかしうさハ（盃女三）
（源のみ）
この物のけ乃こてみもくるれざらもりつや（まみる六条御息所の霊のさわりなり）
わらんと思ボするよいとおしくやえてお
ほさら、まするしいさ出家やうろれどる紙（女三宮御物のけのさわりなるべし）
よそさげみのくえんし給ふさつ今、
さいひふのひをすく覚ゆれどうでてを（出家しうへ）
まひらよしにあハしまさそくし給じ
つくれ後法ちこのべてしかとすくどと（えずわり）
らせなどもうげよもまませ給ふの来つ（柏木く）

へうり乱つと、我さく給よいとくくるしいり（女三の花よろりうるるとく）
やうみしめそてむげよさのむひくさむちう
うたりのひとりさり、女宮の方よ覚えしさ（細　夜宗まく）
まへへうらよわさり給りんことハ今さ又り（柏木の事ハ女三のく）（盃柏木の父母く）
うろくしきやうみもあらんとうへもれ
じとくつとそひかそすれじとのづり
とりちん志そくされ給やうもあらん（夜宗とく）
わらさのしと覚えて女の宮よもそくし（細　柏木よ対面）（細　父母ゆも）
てはまてさびやうててんとの給ひさひらに（お御兄弟とみも夜宗のかくりと柏木）
ゆるしゆかし給つぞ誰みもこの宮の乱こ（給ハざりし）
しくと中くしつけ給ひじめりりくて宮（のうの給らく）（細　柔晶にう）
まことゆきくへゆきさ給ハざりしを、

め宮よとらへしらく
細　柏木一条の宮へ今一旦
まつるべきうく
らくめんそくやる家
女二宮を柏木よ落猫の
うく　孟一条の御息所は
権の令と按察の大臣乃
御一女の子よ候らく　朱

葎も同じからしとく
二品宮 細 女三宮の御方
御心もうるかりさうやう
なれえりくしむ定め給
ふく 師 源の女三を?さ
のを時めかし給はねを桑
葎の歌をきよつかえに
女三宮へ柏木のまゐりや
たまふとのたまへるしく

こうして物せさせのみ人と母上
みを 細 柏木此宮へ
と母みへもじ給へく

そおなゆくし
細 柏木よそれおなじ
きみらくもすしとく

左大弁の君 細 紅梅の外戚
紅梅の御ことなり
師 柏木の弟なり

この細給仕たる人のあつらわんごろほとさらしく給
てんぎしふくつつしよまけるさて ?なを 未葎し
いうくしとんと出かけゆかしかりなと二品宮 孟 女三宮の事
のほしとと共にかしこしされかりつゆそよ 下は二品宮よ給
中くしおは宮へもしくるしきとありやもなくやわ 孟 女三の事と桑の御旨之
やうありうちろさおもうけさまくりしの 柏木のことく
給ひすしと思給しとかうしけるすくおいづ 細 柏木の心也
くてさらもそてなりぬりかありとたまよ 柏木の命短くて女三と末とけずとの心之
つけるくはさ海ぐよいてもまれしとかあり
かなり命なれはさんぬらちかりうしわ 細 不堪思也 師 かやうき歌之
しらく若しるすけるまんかくかうしき 女三の御方中と柏木の家しくおもふなく
こしれくかしわりてさすらひ給おこさせ

まへしおくらへかもさくし給りぞおなゆく 孟 柏の母の御とく 四君のこと
しとくれなりて いつとなく世よかくさは
身しそうかまそめさたのくしとはりく 柏の母の歌
まふとそあることよのをりさらまへはえゆかし
やすき給ひどおほ大弁の君みぞ思へさとおも きき世あくも女三のことと心から也
ことたへろにおもひゆかしつけ給かぞへり 柏木のことく
じゃよてかりつつ君すれへおもしうと
の君な逆しも又もおもづくのいよりさはおやと 孟 柏木やさし
のさのところてまゐるよかうしかり給ぞ
うの給ひされしとおもぬへ今く殿の 給仕大臣の
うちのひともまうけく物ぼやは 家内の人こと
きうちかしを給わくなどうきとこと 葉末のさく

よしみこびに叶ひあつらへし
て今一しびまつり
今この御くにへ柏木昇進
の彼ひに病気とより
なきしらを発して来
閉されつしとされ
見を見るしもなきく

ひめくなかしう 細かく
推大納言に推任あれど
かうのお引立さもへだならば
くわうしうるく
泣きうらびみやも 細昇進
と賀せしらるも 併推
大納言にかはり給はる
こびに夕霧れかうしるる
なり

しめして。餓に権大納言に任ずさせまうり。（柏木の病気とききさせまうくまへし）
（わらび）柱にかりひとらしで。今一こびも手折り給
やうりやおりとかげしの給ふをみれば。
（柏木の病気事しそ柏木えもえずのみなへ）ようしまえしめしひやう給ふしてぞうつし
さるなよも。しこもりや給。地とくでまう（文名院へ）
くとりきされ叶ひてどこ給よつけても
よくきかうわくさしし光しましらふ
（孟 夕霧）大将の君つるにいでゆうらぬひるげくさ
（わらび）とうんひはてまみ法柱みも見えまうるぞ（柏木の病てかりそう對へ）
（孟 北の方せ御大納言に病気によ群集く）まうりこのおんすまふいの御ほうらうさ
のみかとは馬車よらこと。人さはかし
（柏木へ）うさはざもらしなり。しとなて（へ地ごさ）

どもしくしきなしや病よ
こぐれなぐうえ對面し
給ひて
柏木の平臥の御まそえ
え對面せずて君ぐしく
と思ひてかくひまき親
給よえあつてね果入ず
とおりにおしかれど
れしなきへしてみなが
ら對面しあらく 拗夏
河栗田殿流
一條中に關白に成られ
ふる こびよふ野ある蔵ま
いらしりうゑりやのそ
と御あして忍び入なり
まうるなびし對面お
ぼそそらんらいとお
しう佛そらふへきなり
おとぼくて御なえ云々

わびうしもゆるくし給ふるべ。しらもく（拗 夕霧のいみなし）
（ぶりかくき往ちゑへし）もうき院き病よ。きびれるしうんえ対面（柏木のえ）
し給ひで。むひつよりぬらしくみよ。（柏木のえ）
くちおしきれども。わするよいへとあへ。（柏木の夕霧への御えし）
いてうりうしきさ病よ得らつるいとの
づしえてゆうされみんとてふしあへ
おなかさのりさま。そうとなとしうさ（かねの傍と暫時かま如くそ）
しあそ。つれなり給ふやうらりいそく（夕霧もえ）（細 幻此もえ）
かへぞそ給うしめくひつびかうし給はなう
なれば。きれんしのおもしく氣しうべ（夕霧のえ）
きるげく。叶ひやりうつの山ともひめなれ（細 夕霧のんの中く）
とうれ。かよえ悦しそくらうげるう

〽六からかまらひよ
お住居のまうびよんち
とまうんと夕霧の思
つまきもるすきく

ましとこそはいとつ口おしうらひとすじに
うしろのりげすくハ此銘よきうなふえう
めつはよそらひよいふこひとくこうきこと
やしこそ思ひつれとて下のつま紙ひき
すけのまつれバいと口おしう。その人ふもわ
細 御本の月
どなたりふと作りやしきて思ひしつり
御本の作く
とふれてすこしおさあずしんらしまく
どうとらしげすり。ころきてねどその。
なんしうあうかうとおやくきくなく。
扇中ふるそうす
あさひきうけてふかまへう。おまちろ
喜瀬将之
あくりのきうげよ。げらひうふらし
うふかくてぞすきなしまへるぶらと

やせ候ひらひしさら
盃髑髏荘子ゆくらきら
うきうく

ひそしきふうつひまよ
細々夕霧の絹 作 御本のこ
人まもおしど此まそ作り
やしたる右まるずまあ
てのまふ候く

あなうしつ身さきおうしこそ西。さまくまり
らひさ人ハ。そのつらしさとひげもしさら
ま。りのむつしさけるひよもそふわざなる
みど。やをうしげひさうしもいふくきろ
気色一そとふて
うおてさうかうなしてまらしとさらは
じそく。りのあそきく紹けるひらしよ
もけれいはさもしきうてあくれげすり。
のうしうもずつひ給給しらえこるまいさ
うとそこるされ給へざりそうつねのれ
まうらまうちもおりくきうらてまんとし
給とのまふ抱てしう。涸なしのそひて。とられ
夕霧の詞之
まいぢんつ隔るすくとこそらさざらはしぐ。

くるしみてなげく
うくるうれ朋友弟子そ
此梅宗の病悩ハ何ならん
ともろしらずよ口よ
けごらうしみがうつうき
ふしく

いのち終るじのちうくしむや
御諫言れなどして命ハ
うくれしくしざれどもそて
もせうだらて身のうくわう
しもろうしされ梅のんと死
剛なまくんらそうと
るり

いまだうしもかうれ此れらちのとほと何
ごともみそとはりぬしきまえるくいふ此
侍るんびくちてくしき猶をなげくみかつるを
くのまなさどのまよことはとりくやすか
けらめともみがし侍るんばそこぞしてくうしさ
こともまけ色だくちちまよろうもとぞ
まんぎりし申さま月日まへてようち侍
まきれど今ハ何しざろもくしとよまな
やうよなん母げまさ身をさ傷くり
ひきとどめくるいのち終るどのちうく
まやさみすうびうとつまよもたらくまし
う侍きべららうするそなんいそぎし何ならら

まうくし此世のうちれ
細三ならし口腐るうし之未
へりひのべ[illegible]らく

ゑんまつふまとなるを
細海海の役いうべ只へぎざ
るなくべの徒こそとせ倫之
哦孟曰
身せくうりあろう
おぶ八世間立身のすうる
べし此三役のなかうる面白
し・孝経云夫孝ハ始於事
親中於事君終於立身
んなのづくしくくくうり
愚按身をくうりあろうとり
羽八論語曰曾子曰吾日三
省吾身為人謀而不忠
乎与朋友交而不信乎
傳不習乎此んとて我
立身のつとめのいそくぬ
～のうくとぞつつや

のまいる・さらばこの世乃まりしれさらりぐる死
こそはいてせ申るん母やかとしつくう
まうりさして今さうしまれんどもぞ於るや
まう・ゐまつうまかうしさるみうぞの猛
みそく身をくうりうくくこくさ・おうして々
うぐくあうしめぬうしくをやくぐめいる・大
さのならけさらぞだくさん・りのかさそしかうし心
のらまゐしさんへしてるくくのゆのたとう
めうりまはのてござくめうく・るのまうべれかしれ
べうくしそひ侍れとし親母ひげてうさくとも
非ちまうへうれへ侍りん・これらをのあるてく
りのもとれど・ご傷ぐるうしなくくらしれ

人殺まへ　細　宮男と係ハ
人殺とハゆかしとまず
それどもく

いろけなき作しくれそり
然八初めより係と岩よ
れしといふなき幾さえより
かく係のゆうさぬれゆる
じやきわりんとくし女三
のみをおもひみていひそ
で幾さえといひたり給
てもく
係もくとどめてよろしう
此段にてするよ夕霧の事
とどめとききたるの係は
にまふしう係へやひろ
とこてまでもく
なきらんうろのみもびり
うじゆうされさらん念
れたくよ
夕霧のやうをとりかひて
此段ほかも此細勘斎と
係はゆうされさらん夕霧
の細功係ろうんとく
そしてもうさはへえしも
としえうらず
柏木の君しげなりと云ふ
地ところよりて女三の宮

うきめ作しんとおもひきつらしに六条院よ
いさうるうしのふびめわりて月ごろ
柏木の今年は係と知るが事ありしとし
心のうちいひとりやりしとすん作しと。
孟女三のよし
いと用いるうせ中心はぞえうりく。
お係と知るゆで
やまひづきぬと知ぶし作しよ。めしなぞ
係の作事と云ひてさし
此うわ病が上知ぶしくく
腕のれかぶのうくそのこうろの日を立かて。
樂所の試し孟れかぶの試ぶし
係のれ桟楚をとりひいかし
れ気色と給ひりなり旅ゆかされぬれん
ぢらんおのさ海よれゆまぞりとさすり作り
おあまんおそこうとかれいかとでとくそう
て。うじよるおづくんしも。そでり
浦うなだしなり作そおらさるうなさ
まくしま心のさはささそめそうく心用まう
どなり作りぬなまなん。ひとうど中はかが

細
いれざりけめど。いかけなう作しとさよ
徳
まいづくよのさやん心の作しと。いふなうご
此一事今生女三
論すく
ちぐんなどのおりせうるねりし。これなんに
さとし
執うれば分漏未来までむうて、とく
のまれうまへよゆくおり作りなれべうなる
うり添ふくいふく
うりの様乃世のさ海うけよりやとさま
かうとこしのつらく作しいれうんてとく
めくぞうつうおさらめやしきせさまへ。
孟
勘事し
なりんうしろかも。此うじゆうされ
徳せ
さりんすん此しくよ作うづきみどの給
夕霧のゆく
おりよいひしくうしげよのこうえてまされバ
いろぞうそ心のくちよとひおりなすうこと
どとおれどもさしてさうしうよへえても

とハおもひ合さるゝからうて
くまハ朝顔の付ざりしとぞ
おそくゆかどもうすわくは
てハ　盃　ふたつの中に油心
まうくらバ何とこそくく
うけまうしぬぞとし
まれつへて政がりしく
桜　源氏のうしろ見られ病
のとりかうちと柏の妹
まぶゆへ夕霧の刺し
て　梅にぞふ

くちおとしむでい
つかよげらくかうりて
中のしづくりかんまり
まうかたへはるへ霧す
のかげの死ゆへさとと

とそしん。いうか油心の鬼はかハさうら　源氏
よハ柏木とゆうさぬくさもえとぞとく
よさかうかうの乱ふもみすくとりり
まつるりしとも必思ふさうげるさ結ぶと
うぞうかうそしらかしげら結めり
しるきどく思ハすくわりゆく。ハ今
すぐへぞそのこいすひつくんいふう
わぞりつめ戸へりもう柏を。今ハりよふひ
すやとそし。しろへ面ありくるしく
荒うけり心う文を源おりつかう
よ中のしくけ面うるべうそ浦うれ
されどいとうう。夕よすもとしりやって。
えぞくるるげなるで命の程をとおもひ

せかぞのけうはおもひて
夕霧は付すうくまり
しもそうのしとく
油月さくらへうてそちへ
まのつかでわるバ油断を
とらへて源へおもそう
めまへもそてやどけ
他人は口かしまるとも
しらしこちるそ油をも
藤壺女のおまさやうめ
もそ文帝のもしらし
ささ女は沓目されしられ
まうんと云ふ夕霧の記志
とぐへてろひまてく

のどかに油りもとぞうくるんこのを
と云らうれ油心よりのちしまりまでさ
あべきつるで油んおん。まハ油月を
くるへまへとそ。中のしとくてすん。一条よ
柏ハ結ぶ。ふとまかれてくりてかけ中のへ
まんぐうしさむ面しそ。浪るぞおそ
さくしめされ結うんとつくろひかへるのど
の縁いそ面かりきをくしハ中間うるへきれど
しちきんさるすくかりよろれバ出る世る
ひのしりうさ中のし結。ちりりまつう傷ども
りうう気んらん中にもるどかりしおつ
てんでもくさはげハろすく出のうひ出。

女御とは　孟 冷泉院の女御也。弘徽殿柏木のいもうとなり

やむくすり　細 扁鵲と云ふ…ときの人の益ある人の…病…あやむ薬…師…病なれども…あはのきえいるやうに…さ身…これてきえ…法華経ニ世皆不牢固如水沫泡焔

女御をバさらにもきこえず。この大将の御かたなども、いみじうなげき給ふ。心おきての、あまねく人のこのかみごゝろにものし給ひけれバ、右のおとゞの北のかたも、この君をのみぞむつましきものにおもひきこえ給へりけれバ、よろづにおもひなげきて、御いのりなどとりわきてせさせ給ひけれど、やむくすりならねバ、かひなきわざになんありける。女宮にもつゐにえ對面しきこえ給はで、あはのきえいるやうにてうせ給ひぬ。としごろしたの心こそねんごろにふかくもなかりしか、おほかたにはいとあらまほしくもてなしかし

けなつかしう　も氣なつかしに…孟 女二の宮を…柏木の…女二の宮…孟 女二の…人…女二の宮の御心…あはれ…

づききこえて、けなつかしう、心ばへをかしう、うちとけぬさまにてすぐい給ひけれバ、つらきふしもことになし。たゞかくみじかゝりける御身にて、あやしくなべての世すさまじう思ひ給へけるなりけりとおもひいで給ふに、いみじうて、おぼしいりたるさま、いと心ぐるし。御息所もいみじう人わらへにくちおしと、見たてまつりなげき給ふことかぎりなし。おとゞ北のかたなどは、ましていはんかたなく、われこそさきだゝめ、世のことわりなうつらいこととこがれ給へど、なにのかひなし。尼宮は、おほけなき心もうたておぼされて

又八年か拾六大弁寸と位
にのふととしてくさり
わか君の御かほをさえとと
ひさらしもたくよくくひとき
御薫と柏木のゆかしく
おひかさへし　弄梅　ある
薫下柏木の御逆和夜猫
を忍ひしをいや有
し合をくるまも侍らん
と女三へやうれしとあり
ひかる君の御かほを柏木の
わかるそとおひてひさ
るしれをたみとえ

物語なとし
弁家をみてしまつらんと

細　嬰児（エイジ）乃

てのきはかされたく世はよるなかれともしもお
ひきさかへらしさうくなみとくらく給ハこそすかに　それぞく
いとし哀なりし、わか君のかくしとおもさこそ　孟　哀し
とおひかりしもけはかりくへき給ひとぐ　さらに清ましてへき御事との　孟　同し
やむらいの事よくらうきこしもきこゆんとえ　本縁よりて女そのくとく
しらよき御くた心にそそうしら
なかれまぬやくしひよすれハ空の氣色も
おもらくかくこの思いの涙にゐ　細　哀し　孟　同し
つとのそていとあうらく何らこうら穐とら
へおよすけて物語なとし給ハかくわかくり
あそしおくらへささやうよ心さまひとり　細　涙の御こと
さりやいてやいとうひなくも侍かられ。　尼まへの見るまこと

そのけあかしき御
細　さきぞもとの給へどへ
されしくてきとあのと
とく　仲　女三宮尼まで
つき給ひどかくし

なかり女よ　細　男まる
まつばの清院の座ます
尼の姿らうしらう
さとるり

例の御ありさまにてうくらのしなすく御
こしうバりてよられしう侍らすますかくく
思しとてそうらし、猶ぐくそうくえ
ゆかし給ハ、日ぐらさらりすて、いまいしを心ん　細　涙の推物よりなる
ごとらすく限あるさき御よりてそすし、ゆかん給。　細　尼君よ
れいのよわりらぬまつくを給りんとそしかさら　孟　五十日　餅
こしろくさ御をゝ人ていりよるのとくさして　てまいしのことかゝり
やさしへど、院としくせのそて、なの中ら女に抱　源　お　女まする女の出家さて八回しすらゆく　薫の事
しし給りしこそ、かなしすらうして、いまめく
もくもあしかしてごなるこ給りてよらひ　思んとし
よりれかしなどれそひて、まいくを給。　仲　御府へ志をねそうふるへ　餅を
流めのくいてくらるやうよさうすそそて、内前

へんぐゝしうさばゆき
細 河海よ西説先ニ可然
は、あ者ハ忘患つものよ
みうこのやうにりておき
この説ときまでゆさとそぐる
説一説に いそこ花鳥無之
自のこゝろよゝやうの
説義おうと真如のよみ
ぐうしくとあつ説無相明
星よハ坂の説と用て委
二ヶ年九月十日仍定如此浩
講せらく孟津よハ花の説
もろ一説のちハいりわが
よう説らく師説も実よ
すうぬをもの義え
しろハことよのけじめも
西容こそよのつゝと尼
びさひとハかそれ源よ御
て背くさまつらうしろそ
此髪もさゆんでうらくつ

の抱色くよつくしうこと抱ひろりごのゝ
ぐんどもとどしらみもそふき。けしのくせ
あくぬこしうれば。とりちらしおきよごうろ
もすさと。いとこゝろくるしうまばゆき
わざなりやとしみえ。家もゆきぬのそれぐ
しの末の所をひろごりしりと。いとくろ
しとけしてひさいるどやぞてつけなく
かくすうよ末下とひさやりくぬまへい
とえずりしそそむきをすくる。いとどらひ
えこゆそりつそれどしいかしこさくく
てあくしそさならうれたうまろハてしと
よけじめもそ給ワぬ様也。とさく

葉ハ根本ハ梢末の
蓮抱破ゑるゝとく
源のゝく
のさ重之髪とハゆゝぬ抱うれだく
細 ゝ汁花
女三
源氏し
のゝ南し
女三
味 ゝとく宮ゝろ表の
御 私 おくせ 細目

ねハ尼ともふりうらめしき兄
えぞもとく

すきをかこそ
かりうく此まふうさうし
くれなしとく
細 鈍色 半

細 洞のおり
おうとうう
り世で今さしも此まで
みうらへてしお洞のみ白
まぜでしとよみうくし

細 みをゆ此
うらくそ
かゝうりとうりそし
ふさとく師尼よる
しまうつしせしるかとれ
そうしうてとしける八条

こゝのみひゝめの川ぞじとも。さうら 初より
いかやうにいうるなどさきのひゝくゆくゞあり
つゆのけるよつくめ。りくてもうけらくき
みどりとものふららえくるに雨めらしうせに
げすりいてそおるふらず。すくしてそのうそ札
いうくそくめをしくらくふなりくれのそう
みらくもえすらいてハゝ雨ゆうしさそそうし
とおるずくまあ給れど。ふりきうつしもりな
きふらすらぬ洞の人もろくさ。いとくうさえ
ひとそられをすう身のとうるよあひぬすとを
さ雨ぐよむのいゝう口おしうき人とう
くうともみもられやとうらるげさきあそ。

河今指さ入紀え
このの比の尼もちれ之
おりきさのやうろき
細 源の白
細 ちとさそ みびるさよりかり
雨説
細とさうう女三よ思ひ摂られさきと
そびるすとし

とゝめてかり
細 く尼よ如あふこゝく
源と一向よ物りとされ
給てとし孟 源氏とハ
とかりけるてある。
女三の宮のからかりて
け給ば捨てをしけ
しくかくおもひとき

衰のこり 細 源の老は
なれかしけしきよ何かひ
ものし人竹のこのからよ

のたまはせて光りてされど、おこたるまじ
かくいひても給ひとゞまりたらん
うくろん光ゆくべき有様、衰と物がたりとせ（細 父の中しくへ世く）
えなへぬらる海の人へりの衰もあ
らぬりのとくさしとまりてりしらぬ
らぬこともくいへてもこゝゆべからん（細 源の伯）
とのたへでうひるのゝしや物かりあらき（細 柳木のこすトんよからり）
をとわらん抱とてたらりの給ひて、わつ（葉意之）
君とこゝまりなふれめのとしらへ念ん（葉の乳母之）
しへすくかやもれ泪あもとこそつ。（源の乳母之）
給しいざく川のふまつらへさんとまさく
あどの給衰知りとくるす世よ物ひ

しきげさせられはちつべ
やのくなり

まうあつまく 細 王相あり 孟 王気付或ハ王家

まきとぬ 河 眼子遊仙窟
眼中の様く

べき人はこそいづこにもめくへいでと（葉の）
くやもくうちあそして、つかくとしく。（海之）
あううちらしたねあじのいちてかひ海（源の父 孟 各書よ似ず）
のたまはかり出るよな、似給つぐ女いの王さ（細 此乙中名服の父の）
らきくだちくさうどのいりさぶ海はまうけ
づうそけそうしてかゝしませ。こゝり
もぐれてはぞへしもかはそれ、ひきそ（葉之）
いとおそてあるはそへて。おのつきつさくるをく
のかゝりて、あそふくうるすふじといひとおく
れとこ給ひをりよや。ある我いとしくかが（細 柳本よ似かり）
えまうし、てづいはまあかしかするとぬのまゝ（あるは人よ候かりて）
よるかのしとて海もやうしてあれく、うれ

しづかにおもひてなげくにたへたり

細 樂天が句也。河海に

見えたり 河 五十八翁方有後 静思堪喜亦堪嗟 持盃祝願無他語 慎勿頑愚似汝爺

白樂天自嘲詩 樂天五十八にて始

て男子をまうけられし故

に生遅と名付られし其

時に向て作れる詩也

師 これらはおもひより

とりなをば略してかけり

をりおかしきかほざまなり。宮はさしも〈細 女三宮は疑ひなく〉

思しわかず。人はた、さらにしらぬことなれば、

たゞ一ところの〈源氏のこと〉御心のうちにのみぞ。

哀はかなかりける人の契りかなと見給ふに、

大かたの世のさだめなさも思しつゞけ

られて、涙のほろほろとこぼれぬるを、今

日は〈今日の五十日の祝なれは也〉こといみすべき日をと、おしのごひ

かくし給ふ。しづかにおもひてなげくにたへ

たりと、うちずじ給ふ。五十八を十とり〈細 源氏四十八歳也〉

すてたる御よはひなれど、末になりたる〈衰微也〉

心ちし給ひて、いと物哀におぼさる。なんぢがちゝ

にとも、いさめまほしうおぼしけんかし。

まよふさりといふ事は源氏の御心より柏木の生給ふをなげきしくのことわりあらく

なげくには 細 樂天が句を引く。柏木のすゝと下よの給へり。其に對して実父文より

例そしおかりとらんと孝子をしりてはるかに世を出給ふを比想像の御見一と

をいふべきところ也 師 樂天が文に例ふするなれと作まゝく畢下なり。

源氏御心には柏木に例ふするなれとおぼしめしけんかし

我御とがあるゝはあへなん

河 あへなんはあらんなし

師 女の御ためとがをきすへき

媒しゝる女房までも乃

おこがましくきこえんはさ

てもあるべしとおぼり

ふたつゝく

いはんには 細 宮とあ

まりて女の御為なる

しとく源の云出し給

はぬ様也

このことの心〈源の心〉しれる人、女房の中にもあ〈細 女三宮と柏木の媒也〉

らんかし。しらぬこそ〈源の心〉ねたけれ。をこなり

とみるらんと、やすからずおぼせど、わが

御とがあることはあへなん。ふたつい〈女三宮の事〉

はゞ。女の御ためこそいとおしけ

れなどおぼして。色にもいだし給はず。いとなに〈細 薫也〉

心なう物語してわらひ給へるまみ

くちつきのうつくしきも、心しらざらん〈柏の子なる事しらぬ人は何とかみるらん〉

人はいかゞあらん。猶いとよく似かよひ〈源の目には柏に似たりとし〉

抄やしろのこぐまよ
細 没仕ゑ后柏木の母上なる
どしく所柏の子もなき
と歎きふかくし

しかりとこそ給よ。おやしろのうごきふ
おれらしもうかい給しんみもえらことなん人
もれむてありるみことくだらりをとらめ（柏木のあまりのあるくむてをひのかりしとおもひなと）
孟くさだらりもあかりかすけもとりり
しかとふりそらしあひつらふと。数ふ
おしまれじめさ悔しとをふんとひとらう（源氏の遺恨も引出てあはれとあつ）
へしうらすられまひぬ。人でとつりらく（細 此紋事どもとそこえし）
世をう給よ。身の此躰よりすそ此人（女三の）（細 源の句）
ともいふ給やうう人と格そそむき（孟 此人々と八葉のまも）
えてすねべきせまやありくら。あれんふ
くしかうりしもらしまんぐ。うからら（お 女三の宮也）
あかりく。おりさそ

ふ世まり 細 おいぎら歳也
の小松とが世ふる万代のけ
て粮とまたきりん。また。ね
えたくまとうしこのふべき
そとし也面白ある之所なる
いうでいらんとうけて松は
苦んる紙え去しむそと
のなるうえし
つまよみがもてらん 細 文の
様々よ柏木をいいれ
がそとんと源の君也

源 たが世ようたねはまきしと人とはゞ
いかゞ岩ねの松はこたへん。数うりならじ忠
びくらそとし給ふ。ひつくへもありて（孟 女三ひそれ所かふん中なかや）（河 蝶）
卧 かしこり。ことさらまとも時をば。さうそ（細 源とこそうしと思ひおほくし）
もそそし給ども。つるよりしもいへりのふ
うるとはおりせねど。いうぞ久しくうなれ（暁 女三の宮も）
とれかりうくて給も。いとふびんうるしう
しら何すはへおひまつへし（細 うそう夕霧柏木の逝去のおすとあて）
すん。さねの気はあよふありて何のめう
しおかりしと。いうなかことまよりあり哉
人とうりの御わらしまうさ悔あうしのし（孟 柏木の病弊ふとざりの时ありべるれど）
ちさえりうらおそありうしまよ。いと
あう気色をとそしかしと。つあかひるさき

一条の宮のさいはひなかりし
一 あさくくやし給
孟 紫上の御事のすゑとが
源の後はゆるしきこえざり
しとく

とぢめつかた。をりあしう。いぶせうあはれ
みをもありしかれど。ゆるしげなうて
細 柏木の連枝之
かゝうしの君だちよりも。こゝろあて
孟 女三の宮と夕霧のいひ合せなきて
と思し、のひたり。女房のうくせどそこ
あるありさ御。かどもしるくさるやうに
もおしてすゞやうに思ししうらきの
孟 速也
じよまくさりとも ゆるしゆへてすへさ
係のし
しくハ二条の宮のさばかり限なる
くしなどこそしどいゞし既くとに
ありてつるにうけとじめなりまへ
女三に尼とゆるしきこえたまひしも
なりのとるども。そりあつてたく
こまかにも葉を廻き
に。柏着しりしてそむらくべきえ

いとゞかゝりて思ひやめて
細 柏木の事を云。夕霧乃
定ふまてらく思ひまさく。
紫上を見給ひて抱思ひ
くりしおやゆかしまうら
しことちるべし
よろき所 細 人々大夫
夫ふうつく、勇とと
てそこらなふてしある
りのなり
つらじくしも
何かくいつしう意さ
まみえくる。勇すの更へ
ころ心りて柏木の心
ごくとりぐさまうて

のぞみありしくをありさまし。いとしう
りそ思ひめかうんべいは人よりげ
孟 柏木の心つく
ををりのとうる何ぞすどこの人の心の
からはそうみんとぞ君へまうこさ
まくまうしりどすまいより所つさ
夕霧よ好色そゝくなつり
てあしひすぎうしけぞいしうく
わりなく
きとせうまじれこうるいとまそうらく
しも夕まうべさこしめやはありげ
人のとあみもいとかしう。親方さ
細 因果ちうへしく
づゝまやうみすへさ、さうへき宥の後しい
ひあぐしうぐくちう。あらうき
細 ちう夫井一處
くしありしなぞくひろよちへ、女宮

ねらしきもえせずし
お柏木の遺言とやおもし
て深の情気をもつらされ
しくされてえもられぬ
ぞあるべし
わくふく　師　法服を着
さらに能をへきかつり。
みんな女のならひさくなど
ともかくされたり
七日〳〵の法をさとりてなき
前よりもくつろひ日数もあり
あつてもにうつり柏木の七日
くをもえ父母八却あくれね
と人の気をつけてさせる
うれへせしやもとくく

まづたちこえし出給ふらん。さらばへさつゆなく
あるて。深みもまさりし。御給ハざりけり。
さうハうろしくさきんらそめしとやおて。
れ気色もうまく得しりそらん父母など母
少方ハ深のひとゝ海なく、笑しきれうてて
のあくもくつり日数をとゝえら給つゞく。ぬま
ざの得うゆく。ねさく。なくされの
いそぎさとく。身ぞ逝れりさくいりぐつり
すんとさせ給ぎて。給御のあきそてゐなく
も。たゞ大弁の君をさせ給。七日〳〵のほどを
ぶんうるぞも。人への心みて心ぞくりとみえて。
うれよるさりせそうくいうしくさひま

かくなる海しけ　咩　父の
あかりよくとつくをかへ
うえて其の冥途の深かる
べし
一条の宮なとハ　咩　女三宮ハ
柏木室く細　柏木よ深
終の訪ねるさしく

どうよ。中く在る海しげみもしそゆらく。
あるをうよ心ゞりし得ねさり。二条の宮よハ。
おして心づつるくて。まされ給かし。根
さん。ぞく日をうるまくよ。ひろさこえ給
ら。へげなくあうくいりそげふくあらし
くつりひるてまひし人ハあり給きりと
かくひとく。ものこの君給しいろ。むせる
ど。そのとされおつりじめし。これ例く
あるのうちうしげて。きそりるよお入ゐさ給
も。しよふれて哀ハつきぬ柏木のなんわ
つくりてつひ給しねでうじと見。つ
よひさ給し。びれ。和琴をかしのぞくとう

花も時とこゝろえたるさまに
かゝるをながめて
仰ぐ空の月花とながむ
るもはかなき人のこゝろ
をつけて見るべし

ろ情どの　細 芳子地之
既 住の名くいづくにも公
語類あり
弁の名筆ね　細 柳本の
兄貴なり 師より相まさ
ことさら人ハ和歌の道
あるまき人の心こゝろこ
とくよそなる空をこえて
西の名ハ経なく弁。筆

柳子ハそれをそばとハ
ねし

つまりあれバ　柳本の歌さ
ハ芳蓮歌よりのこと
うえされど他人ハ別よ
まぐさやしあられバ画
角戸をもすぐてよの
つゆの人しれずつらに
てあるべし
されどのかゞまき
細 歌も人へもとめぬ
世なれど自分のある人
かぎりハなまさやべし
とく

おかみの内ハ結をいそがする人し
くるわやつされて結をそてぬも。いと
既 結人傍よられてむすれさく
むすれいうきよきなりや。いかのまだい
さうなりて花ハ何をまぞすれぬ気色
ながとながめつ。地ハ惜しくぞふつて梅人を
も。ひゝろよやつれつ。ひゞしうつれぐ
なる名りつてさ花なるやうよかとみ為し
以次西よりものし
てうよとまりぬる人あり。おかれ放廢
まり盃柏ともひしもし
のれけそひとしそうらわされてハ名され
こそうすくもあり。大ぬ度のおりしあるを
あそりけれせそこゆかしいれまる倒の
弁の名筆ねるものおりしろと出かり
大和の名也
つらといとそとげよそうらたまふ

れりてろうみくいうまそうりやのひさ
しはおゆしまそひくいれもすり。とよる
べきうしよ人でのあへきつひさくらえ
人ハうじけろきさ海のしまふれどし流　細 落
柴式の浦母く
息所ぞとひめるる。いゝどれことを不
すへうすけくらろいさるべきんでめとこ
細 夕霧の君　柳本の手迹かもし
えくるぐれと根あれバさうてしさせやる
うくるそてよのつゆよるすり竹りにけり。
細 一条の宮の手迹えありこし
いまその頃ぞものあひ並ぞと侍しうべ。
とかくうばへおひまうてゝてうらし
どろうすんハうん雅をのびめがてきさせ
すれど。まされさびしん経のかゞめよ
ハ。ひすつきよすんよるうがひく。みうさ

弥生きく　細　二月弥生
かきくらしげきはじめ　師二
月の余寒に年中行事之月
まかせらくはくみて
ぞうかわるべし
きさらぎのうらうらさしに
禁中の弥生ゑひさかしい
和のかぐらしてうかれ
まつりて出仕をやめん
事例ありけるべし

ふの猿さるといふんをいふんとれみかげなるうちかん。弥わかるどのしげきころ御ひとさそうのさうざしくはまうさんし、つくづくとこもりゐたりんも生ひするぬるしるさりされど。（禁中にて主上もつかんておまうされハ今までも定門にてし）まちゐるりしるさ中くよおもひそふあんらうあべうてあん、思ひやるすぐし給ふよれう。（梅壺の女御ぶし）ゆくじるあどのうへんとそうり給ふ、あ文（細　夫妻の中くし）給うよつけくも、歎よのにのやうとやさうりのかくうる御みりしいのふくありひがし（廿二夫の御ん中とをし）先んよりん八せん猿をなさしうらりうさくさ（いうてのおあく）すりよへてつきをいれるんとて、あざやかを（夕霧の若ぶの丁の之）しのうひたるみおりくし猿、わさやかうよけさうれ（材　夕霧の材え）

奥の坐行しのくち
細　藤架の花乃所に海く
晴　女二宮の歎のする

ことくにくそえさ
花　柏木のることく、又女三乃
のやくうりありる
もん　孟同

りのしるうりしうさ海めゝて生し、うやを厭とそれ声よ妙まて、衰ふりした（細　わ皇后の住も御当の）そのつゐかむさ世のきかよこそハいつくじと（思ひしぞひさかすまえ　晴）てとよゝろひするこしかやかして、ゑへ（夫を不いぞ）りりめうろ人ハ思ろそころつゝかうきて海（ひさかすそし）しゆうと、定すに坐後しいりしこ海のいとゆくそうさまくもでしもうらそ（藤架の）き給はのじしさをよこし給れいゝ人く（材　れ皇后の令なりくてく）いてうろうらけうみのゝ海ゆでおりらんゆくくりのでよそれさ世のさ思のさと海とさのまへとくさくうさかやと（細　柏木と夕霧とをえ）いとさ所うろすくたんとそのづしら

いゝめつらしさよ
細 此ま植木よみづけまゝ
こちら爺さんこゝそてなさん
しこゝにゐたら 喋 植木
のちさへはやくまゐりし
よろし

ぐゝの 細 山島屋乃
んのなをぬらやしゆかひ
しとも〳〵 おや 殺狂の綛
まアあひ来雀も此間ん
くぢらべ殺ら別の姿ぶぬ
まるべしとおもひて日々
せし〳〵

ゆめぢうつゝにもおも
ぶひ 細 ふゆらしんづよく
いひしがやさ人するも
のとし〳〵
それもかなふまいと
細 それもく早世のゑべ

うきはすりしひめくらてとよびち給
やうを侍ぐんちぢめつさしり、たさく
うけひろきゆのしぶさうしたしく縁ゆらぐの
れんむけりをんぐりしう、流めもしろし
さやうよおやりしゆゑてられ気色ぞの
侍しらば、うしるよそぐりしの心をもさて
の、とぞ〳〵ぬ〆なりしも、やゝ入るにそ
なんとまりつゝとて蒙のやうなり
しゝ縁をあまたよせあん、おもそれども
うしのうらん忠いぢなんぢのへつ
よそをもあるゝ人ゆゑしもしとせひ給
ひよ私いてとらやもつ、それをるやゝみ

きこゆるのきゝもひけるよ
ハおしらはしく
ミこまさら 細 思みすごさ
らハおなりらずよらず定
てのふすゝな若と思ぞ
ぶりいし心ゆそてやせ
しらじらく
いつくみをも 細 中ぞう
なりく思ひとりずとを
おもかりせどもよをすぎ
ござりあふすそとも
て給ひゞる中空みなく
煙みをもすぞれ給さん
おみつる是とられあハま
はきやらふとよされ姿
二人もいはれはいふき
えうせあつしもたしう
らねなすの心ゝ両でし
くおゆびをふひのふあるへ
さうふてもなうもなうや
かよ おや〆をおふもそ
も歎のへいゝさかうに
まくやうよ女二のうせる
りんと場よ今くすくゝと

とおつり侍しくぶりのきうしとこちらは
ゆゑかりけのしとるしぞ、おしらとこくも。
かやうよまづき給くしえんみつく
ぬこしまりとぶろめさこゝろよハ忠給
しと、そうくこみもよしん中ぞくまう
きゆもくをあらかれハすよるへうつね
でよ、煙みをもすされのひさんハこの姫男
のまへ人をてれどは、こゝろよくちかし
かうすぞされども、さりとそてもえうなりや
かまえをひきうむまづしいるしことなく
つらゆうよ、いてられつるあさうしぬは
とふつひの、寂くよるすり侍めりもとあり

えらひさへ中にもとくちかりやうは 孟 遠え とて今はいとゞめでたし 此わたりへ一
しらるゝひのなく 細 夕霧の御つり給ひてとらへ今は
さる八の御ちゝ君おほろけならぬ 晩月
給へとのおほひしは君さ 句愚抜
さる御こ給し夕霧の御心に 思君夕霧の今八乃御とこのおほひそるゝ
まひなきかさうりとく
よそのもさして彼柏木
の遺言をあひて契給
きこしよてそのことはあ
さわしとく
細 柏木在世の時八此文
をおもりられさるやう八
なんとかくしとく今ま
遺言あるをさてけ侍
難さすとく 花 故左衛
門督とし二文との此中に
ならは見てくざりし
と今八のきこゆよ二文の此
ふすこし遺言ありと
まへバうきふも婚させ
八よし侍るとて此集
かのあさくまるく 孟 月
ごうりもくさこし御らもさしうしぞかる
此契ありもこふそかしとやうおもほ
らえざりしれんぶんすれど今やとそ
これをまつげとさ給ゆゆいごん乃
あきれるまるまんうきふとにつきせ
はましつる給ひもちりとていしいうち 夕霧の麓所より推しはかりし
い給けるひらすり 細 おねをとこゑよめ
らひ給てれ 夕霧の詞 おやもうるいとこあつく 柏木の将と云八此おほよ
まうけ給つりし人のしるべうてやは 久早世おはしくやとく
をりは外なりとて 孟 ふかしとせさせとしと
一三条のこゝろすさましめいへ、ぐゝしめるとて 細

あはりせのしりそり
細 雲居の雁かたかくせ
君のさとまよちくとあ
ハとく
おもうやかなり 細 明石
やうからう方ゝ遺心八を
まつやらくてまわやとを
捨し連くいりしと
花日 我一説おもしろきとて
人よまつ冷しさき侍く
さるうちらん八花やうよ
人近つくる和御の心ききわよ
紅ちり祈りりて善
通の花しおろき捨とえ
のえ八あらのん 細 柏木
夕霧より八ひとち年の兄
之師夕霧見え八歳之
ちうらぼそけよえて給へ八おほ八世
のこりるをさひそりの御ゆかり
人のすこしもそてうかりしら[illegible] 花 法まとされたる 仰 さうならんと えしてむまへ
細 遺不及のこと
くしれぞかりてはあさやうるう下ひ世
えうもしくび捨まうとるん つねつきう
夕霧の早下の詞
ざりしらねくよりさわうころしへべ
細 夕霧とふ伝さへともれしとて
こうおましと云給へりしろかり
細 侍みもすきうて二宮の次御けりみがくらんどく
を人よかさりてけより御けりするげく
女二の宮く中と夕霧の此八見れるがらしとて
らんれいのすられんうきせもるげまいらと
むかうしも侍られおほどかつうつこ西
盃 心ちとせむしせとしとし
やうよ姿しまえてやゝ猫へしてぞおほかたの
えどみ六年のかどのこのうこゝかり思ひど

しづかなる 河 深草の
野辺のさくらしちろ
おくばし――
おいらんことゝ 細 ごと
し中の評ハつまくし
さとそもんしく 絡
わし夕霧のいとし 藤屋
まと会ぞらにうりてお
ひろんとくわしくつりお
りんとしふうこぞうよ
とと 表でうよ花のき
かりハおりなめどおひを
んすハ命おそりけり 評日
守 われからぬき 孟 夕霧の

る浅いとまりやうよる海めくさ おいらんれて 細恋ひ
ふちうけてひをいふ花 お夕霧こ お 健物つまりさんし
抱しおひしられていとすしうらよとそを
くちくおくあさけもひしてうんのこそ 細男くしきこ
いとまりくしてのしるるりてし人よさそくれ
まくふわうさ人へどハ抱れしさうとすらし 女二家の女房をさ
ゆきれてさいでうしすわれ前ちうさ様の
いとゆりしろさとこしげりりやとくられ 夕霧のんとよゆりつる計こ
おゆりもいはくしさすらおりきれバ
おひんこともしくらずさひく 夕霧詞
げしあれバうくぬなめよ見ひくりり
さえられすやどの様もわざとそのうん お夕霧のこ
もじうしてくら 絡よいとのこう 藤屋の母

新し 喉くつえ枝あしとハ
女二と柳ネと二人の一人あれ
しらし
この表ハ 喉 誘息雨のうさ
しりのそしくかよぞと
八月上旬のるとよせさ
つし 息出表ハ月よのと黄
て花の上とえしたしに
とふわり 河滅こどろ
条とうりけてたし家と
あのもぬてる表の柳う

歌のけうらも 細 歌
の要よてそりぶらつく
ことぬるすれぶられる子

小息 この表ハやるえのめよぞ色とわくさ 息使 ばさま
きちう花の切来きしねバと窓く絡いとふ
き雨の中央ハうくられども 絡終ハるりうどしとく
うさのしふれおくしねど。いまわりしうりど
おりとハいそれのひしうういうり花ら。 藤屋の内母のまく
夕霧のみく 芳りしまこし 花えさく名ふをやうこひめやもてしとく
げよめやすさ花の月そこるりうりとそ
お夕霧の一家の家よりすぐに沿仕太后よ帝の上
絡ちびのえ扇よやぐて系りうまへれなく
表達おやくこ抱しおてござよいうさの
お出居 細つるの歯く
つとおれぐやとくのけいでるのうさよい
沿仕の悲歌をさめてひてく
てまのてり。よめくのく對面しおてり。ふ 沿仕の
川氏の名孫やとりてく
てしどうきこけたられりしち。いうこ 此比ハ柳系の悲
傷みとく
やとやろへてれひけるともとりつる
ひ絡なるバたけりてゆやのけうりを

のこされたまへるハことに
いとゞみすゑのおぼつかなくて
此ころハ二条宮のすまひも哀
に春さへさびしくされぬ人
さらにかうかりてはかなかる
ならべし御 御ぐしの春心をかきつ
此御かたの春心をとゞめ
かへるさまへと源氏
の夕霧に宮ひしくなる
といへる詞なるべしき

うちつゞきよその柳の
おもひどもの色をみて
ことかぎりなきものし

げにやつれなきりこゝろ給ひけりとぞ思び
ぐさのれハおもひまたおさまりし人にまつれ
おつる涙をそゝぎしつけまことにへにそめ
てぞかりそてくらし給ひけりとはわきて
いと中にも柏木のひとしきのふゆかへ
ありにける落葉てえしめ給ひにぞたのさ
となれしてかりをとてうち給ひ一条
のうちやまうでにつりつゝありさ涙のみぞ
さらし給ひいときよくもありしとゆかすぞ
形の宮よりすぐにぬぐふそへぬふて
うぐひすの柳のめもよそしとわりへつと
くいまへ行と夜うちまへがめてとえんしもや

付ハかくとおもひつゝ
その柳の色にしみとや
とあるを落江の君に
よそへおもひせよて

女ハうきありさく
御身ハなりて人をねおそれ
そのよみかくれてくるひ
かの事の色をくみてとく
思ひ給ふ今やハかのあるよ
へぶくる柏木のことに悲嘆
かなしくとのみに

とふかりつゝ給ひうちひそこにつゝくと
給はら涙まへてこゝろつかう御ためやう
よのなかりけりとはかなくさぐりすく人
まことにさらへしとぞうくへれどふ
おもひくとかのみの御けしきとおなぢうら
かなしくぞみれて人のさしうえさめくる
ひ給ひつるぞさの御けしきのうちうれ涙まつり
し給ひぬるによそのことのあはれ
いはけなし給へど女ハかきりわりなくいらん
きこえなうあるかことをもうらことをもお
ちへのかねハかなしびもうちへてなん
ありきちぞうらしうちねどおもひやけ

限りなき位につけてあひ
かの思ひ人に　かぞへ柏
木。桃梅の息合れば夜
位たかきことにつきて人を
執着とおもふらくも。
柏園ハ家礼の家にて
あらそひけるハ心ぐるしく
かうやうなりしひハ
哢　柏木の中なるまけ
さハ位みも何方もなく
にはるかなくふうくう
おりしよ無きかくく

さらばあかさて
哢　入道悲しき人の
こゝハ柏木ふごとよるか
めくらん

さそてし海士もぬれやどりく人となりけりほ
かき位よつけてあひしのむ人々。ちぎのり
くちつきてくよ地かうすりかなどしてそ。（柏木のくせよろこうと）
地ぐるさはおりぐるも、かかりよふれてあ
るべしうりかうさきうひがそのえるこのよ（細　我ハ夜位のるゝゝなど）
の栄しも、つかき位も地わりわしきでこ（すめずとく）
とかのこともりしげうくのあり
さ海のこうそ人がらく急しうりきれ。
すよだらのくしかくつハさひさすをと
べりんと。雲とおふきてすゞめ給。夕
蔦の雲乃氣色。よひいろよろぐとこと。（こうき）
花のちりしく情とども、あとがめとく（細　夕霧のれかよ）

木のまその　細　その脈
娘よしろよ依らくなり。
かそこ恐れにしせぐり
哢　釈のみの脈とをそ
こるり勿論く今もを
おろすり
夕きく人とも　細　柏木と出
くけなふかぎらとし師夕
の霧とハ墨染の心く
悲さこれぞ見つきくハ
地をりけとみり
こらかしや　細　我身のせん
どの悲とをもらつをそ
こうさし師られさまへ
釈よ脈衣とうせ給を
くうらそうかて

め給。この脈くこうぐるよ（細　此御息所の喪にふくし給ふ）
木のまさるもつくよぬれくさるき海（致仕大臣）
よ霧の衣さくのきられたるの色
夕　るさ人もあへぎりもんうらそて夕（ゆふべ）
のうさとまさくれと。ハ弁の色（孟　紅梅の大臣なるべし）
うし色しや霧の衣旅きつしまり（殿の大臣）
されよ花の数なん。ほわさなしのつ（双紙地也）
すれバいかしうすんさもうち夜の（細　雲井の雁也）
小方とべさる袖おくしのくろうこし（細　夕霧ハ）
よむ。経なども衣よ。かくさくむぐん（抄　落葉宮の夕霧のよみて）
てん給ふの一条のえよもつゐよよ
らひさそし給。卯月ごろの空ハそこ

一 村雨と 河 若紫ノ巻ノ下
一 村雨虫の音のさはげ
き出なくてしすりに
々る
虫の音そふらん 弄 葉の
引哥ハ虫のねふかきよ咲
べくへり。今ハ友多れば
虫の音そハ秋を云ひ
やりてつかう面白に書

ちらしとおうくらまげよ。ひとへ川多めろり
雲方の楯も。おかしうこゝろそりの
まよ宿でし。よろづのいよいよつけて。ご
まよんぼそくしくしいひあみの。例の
まろりうへ宗。唇をやくしくめんそこおり
おもえしらきりこてうしらのすかご
うすき地のうくれのうこまよしとごさ一所
えがわかり。前栽よくられくつさつろひ
まひしもらよまうきそてさけりあひ一じ
らすこゝとしくのかしげよのろうりて。
むしの音そそん秋をひやうさうり。
いて抱衣本露かくてはげ入まふいしよ

の哉りこうりりさえ 拾
表すれば虫のねそへ秋
ハいりゝんとく 細 千代
果守僧正 文之の一首
落葉あかく虫の音そ
りん枕風そ吹ともあ
るとあてどもれつや
枕めれふもろうて
細 衣うつをそハあれど艶
多すれども有り
御簾ま と云らん

すゞけしくて。ひろびろのおかたの衣くゝし
よろもそぞろけ涼しげなるみえてしらくま
らくのどかなるやうよにぞめかりざされつま。
しらつさるとはのこしよりおかしきれ
ど。枕めぐりのろくをるはりし。空ふるす
のこよねのへばあらねさしのぞかりいと
うるはしくるうつ地生のしすりとてきいの恋
雨ぞらしてしりしもそれど。はてつるやま
しゝしてわりのすくりもうくくくく
まゞらしにす程。おはまへのこてふらども。ふ
めとるげるかれ染とそのうも。いと
袍衣ろうりしは来とゝへぐくとのそれかり

しきすればきぬもかはりなばみ
つゐぶねとハ二子のくるまの柴
ものゝ作ハ息所巻よりこれは
あまし 細 うくのごとくなり
ごとく柏木とくんでなり
まことなりし枝よそわ
らざいね夢巻のゆゑし
わすらしとやつゞきしか。
のかけるの作柏木にあり
ことに基後の段ところ。
新古今冬 時しもあれ
そハ紫式部のうきよ月ま
けしきなりぬ森の柏木
所 柏木の夕霧よ今そ
の時のよひとゝもしこと
とうハいらへ給ひし
あまじへもろき 細 夕霧ハ
くまなしいか方もあ
まれなりしく 息所とある

けはけりやくるまかへして枝ちらけさる
といかなる寒さよりすさまじかへるかの
さよるじのあそこのびやうよらしかり
く
ごしきすしふたりの枝よかつき人柴
るの作のゆかしかりきしまずのこのへ
ぶそあ待てゝそぶらしめくそれとく。
まげしまよりぬまへり。すまびとうさ
くさいといくうへとやさげうとやしと
これつかこ見ふぱはあへ立もへきこも
あかかねのささとりつへして
しきぶよ紫式部の作ハ小ちきずるも人

夕霧の子息いとそくまるんにそもへしくかしへさけつひしてあり
しび家も赤かくやなぎしさく
らはれよ 細 御息所の返ことあるべし。
ことゆりしハえくましくてしく後撰比巴の系図と似せくえり
を承るべきもの 女二の宮の系図をよろしきもの
とかくしてかくのきみのまきあるよりは
よ紫式部の作のまいのをたてにしくるものなれ

かくすべきやどの末ぞとおもひつけなり
の許をさしく法師付て添しきそへし
れしの紫式部おもしろきもへのすりぬり
とうてもれどげよとかわそるよ。すこし
ゆくえとしてまひぬ。ゆ息所もとしぬきり
あ給けらひそれバやとうぬるとうり給ね
うき世中とあのへとつむ月日のつりかくら
どよや。かけくらもあやしうかれぐ
あくそくるうり給ぐくしびくてきるみさせ

いかなしても　花　夕霧のきす
一咲　女二宮の事を夕霧
のかよひておはしてとひ
給絡しくて
義ぞよいりよ入らされ
おタ霧の心は女二の宮中
をかひやと　細　中言なり
なりゆくとく　師　柏木にお
ひたまひ本となるべし
しまひ別まへて

絡げたるつらひのいとゝしくけるをよ。あぢは（ひゆへよおき出つゝとそ）
へとしてさんとそけるや。ようしげなり
れなんひるなりけり。御ゆしすげくて、世のこと（細　夕霧の句）
こなたすれど。又いとしきのこは。いとゞしき川の（こなたすさいそて歌出入ぐさし泊）
しまるべきまこともは。待なかれ。さすなり（ま義是世の葉因とく）（細　いまゝ歌も泊）
ぞならひかなるよなるをへるすぐさめゆめし絡（かな神なとく）
此をるこきてしきりは。心のみくみえしめ
へ義ぐるよつるよ人らしくそれなることよ。
もりそへて出でたるんと心の出るもこぐれたる
ねば。いたくらんじめそれさ海もとく入（夕霧出ることを心ひまへゆく絡よ同まうて）
まそて絡なりてむらぞいとまほりへ（細　女三のうつりて形ことどうか絡しく）
え。りの絡まし。されど。いとくぐるしうなる

まちくへえるめよ　細　世の人の
人をそりそらめしくなで
せちの二すり。此二すりで
心でそれなるべくなれとく
とさまでさいりしるを。
愚按　是八柏木の北女二宮
のどうしく夕霧の心ま
心く只若き狛なるべし。か
入の国の不足なりとて
なでてさひかくつきるぞ。
まよ又さ　まだ北女三宮
なかよるなどそてらとまで
はとつぐくえくし

のみく　細　源氏のまう
しろく。今案柏木まさく。
この房といいさへきなめた花
とどとこよつきそ源と
なんたく。是八柏木のなり

くらうたき狛まぐらんあるしずしなさくえ
さかめよらり人ともいりひわさ。又さなる
まじきのみともいうてつぐきさぞこ海の
しや。さぐんだらをのどことてそ。いひりそゆかん（細　夕霧）
よは房んじしするなへなれとむりて。今は
枕青よ出り月しるすそへてうしなう（の句柏木よめなりさゞくべかきし）
をりそてるすせすへるまじわざとけるう
びて。はおくねと絡んでつよ家色でくて
しまさてし絡すとすざこいとわかやう（夕霧の柳く）（河　大小うけのさ）
よくしけさらりのくなうそそへろうよ（花咲　源氏まさ孟　道遥院八柏木とまゝへ）
ぞつて絡りなく。彼也とくいはまさ川のくしさ（さこすくらえ）
つしうす海めきこ。おそてまおのさやうつ（よろくく）

かくらるべし此段の
女房ハ源氏をみせまりく
こしくおかまじきなり。
うぐよ物まるうべ
とかく

ゆくゑなくげん　細 菓初
林しわるとおもふしと
うらひ給ふふく前よ
家とやうくめとく
出る前をおぼえてぞち
とおりとそうくさひ
人まふく桓公金吾
将軍なれども、そう
河 天與善人吾不信右
将軍墓草初秋
右大将保忠のうせ給ふ
詩ハ右大臣時平ハ息なり
遊ぶとらて此韻字を
詩ハ秋とおりと今改め
てまた誦せられけり。
忠心優美るなる物之卯月

さながらこのあはれびすくなかり。これハ　晩 夕暮
せめてかやうにおもひおくらうしものと　廿三丈の女房生のこと
みな絵合びぞ人に似ぬやうにしらうしめ　廿二丈へうしひ云
あそび出るあじうかめかくも。お入給ひま
いかぐるぞんぐうふかり。右将軍がつ
よ。菓子をじめぐおとしとうらくらうさ
ひくそれもいとちかき世のことなれど。
さ御くらうととうぐらうぞやうな
つし。世中よさかきをしられつも　同 慨惜むくし　盍 柄木初こ
とわうしうげぬされども。ひべく
しくうさをいさうりのふくおやそう　永華絶の玉 有織才輸
すきげとぞさる人なぞ物思給ぞれ　細人また怨むらしく

の比なれど。秋のはじめつかたハ季節も遠くて。其のはじめて何ぶもうるひハ季待の心を
さうらば眼前の景気もうつりて下暑 死ぬ花 とも唐名右金吾将軍と
いふべし右将軍といふよ　細 相違なり　保忠の大将乃卒去ハ美平六年のことなれども
それもいとちかき世の　細 今古おしむ物とし　晩 保忠のうせ給ひし此物語の時代よりちかし
あはれとぞ。
さればそそぎて悲しくそゞろに近くとそゝるさまなれども世の中よ
て此人をおしむとく

だぐさしきあるまじき哀やけびしく。女房　柄木の事之
なりの年ふるめきてうるどもさき人ぞ哀るな
しひきとほらずしてうく人にハ心従なきもの　細 今上の御琴の師なり
ありけるよ。まづ川出でし出そなる人立の
ぢをも給ひなあれ楽器のとりふくと　細 うくひつけうちまくよりそり
くささなりけるはまつけてもいかぬ人なり。
六条院はおもして衣とは何しけるこし　源氏也　細 葉之
と。月ハ日よおそくくはかりのわりなるを
これらひきりよいふさしくさらしまる人　盂 源のくまよ柄木の形見と見ゆふと　人ハ去しあへとく

とゝんのおもひかゝぬことゝすれハいとくへ

そのゝ秋つゆさよるすれバこの気ハよくいるごと 葉 細例の字とめ

みり盃などせてあゝゝのみるすも イもいの字なし

つもなのど

国立公文書館
National Archives of Japan